被爆と敗戦後を生きる

――ABCCの原爆小頭児に関する内部情報を流出させた日本人職員を中心として

平尾　直政*・中根　光敏**

（受付　2022年10月25日）

1　課　　題

1964年末，広島の作家やジャーナリストらが作家・山代巴のもとに集まった。被爆20年目の広島の今を記録しようという取り組みで，彼らは「広島研究の会」を結成した。メンバーそれぞれが持ち寄ったルポルタージュを１冊の本にしようとした。

日本は高度成長期を迎え大きく変貌していた。前年には東京でオリンピックが華々しく開催され，５年後には大阪で万国博覧会が準備されるという状況の中で，被爆者たちの訴えは「過去の話」と扱われ，「原爆を売り物にしている」と言われることもあった。一方，被爆者運動はイデオロギーに取り込まれて分裂し，国内政党間の代理闘争と化していた。

こうした状況の中で「広島研究の会」の参加者たちは，自らの体験も通して「今の広島」を記録しようとした。原爆スラムと呼ばれた相生通り，アメリカの統治下となった沖縄で生きる被爆者の苦難，被差別部落の被爆者，親を亡くした原爆孤児など，広島の会のメンバーたちが取り組んだテーマは，当時の広島が抱えていた重い課題であった。この中のテーマのひとつに原爆小頭症があった。ただ，小頭症の当事者たちをなかなか見つけ出せないでいた。

1965年，作家・歌人の深川宗俊に呼び出されたABCC（Atomic Bomb Casualty Commission：原爆傷害調査委員会）に勤務していた女性（山内幹子）が，ABCCの内部情報を極秘裏に抜き出し，深川に手渡した。この情報が「広島研究の会」のメンバーである秋信利彦の手に渡ったことをきっかけに，原爆小頭児と家族の会「きのこ会」が結成され，1966年に厚生省による調査研究班が設立され，翌1967年に原爆放射線の影響による障害「原爆小頭症」が認定され，各種手当てや医療給付など，「救済の道」へとつながっていった。

本稿が明らかにしようと試みるのは，ABCCから内部情報を流出させた女性・山内幹子に対するインタビューや手記などを中心として，被爆と敗戦後を生きるということに，迫って

* 広島修道大学大学院
** 広島修道大学　人文学部

みたい。

山内幹子には，平尾直政が2017年６月１日に対面でインタビューを行った。彼女は，この時すでに体調を崩しており，長時間座り続けることは難しくなっていたけれども，記憶は極めてはっきりしていた。以下に記す山内幹子に関する記述は，特に断りがない限り，このインタビューにもとづいたものである。尚，本稿に実名で登場する人々に関しては，全て敬称略とさせていただいた。

2　原爆投下をめぐって

楠本（山内）[★01] 幹子は，広島女子高等師範学校附属山中高等女学校（以下，山中高女）[★02] の２年生であった。入学当時，山内は江田島の自宅から船で学校に通っていた。当時の生活状況について，山内は日本民主主義文学同盟広島支部の雑誌『ひろしま24号』に手記を寄せている。

> 私は教育勅語の「…汝臣民よく忠によく孝に億兆心を一にして…兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ…もって皇運を扶翼すべし…」を素直に身につけた軍国少女であった。
>
> 昭和十九年に父がトラック島に出征し，四月には山中高女に入学した。戦況は日増しに濃くなり，食べるものが無くなっていった。砂糖は昭和十五年位から統制となり，すでにこの頃は，田舎のわが家では見ることもできなかった。何年も甘い物のない生活はつらい。しかしそれは耐えられた。が，米や麦がほんのわずかしか配給がない。これはどうすることもできなかった。父はいない。食べ盛りの三人の弟。乳飲み子の末っ子は母の乳が出なくて，うすいおも湯でよく泣いていた。年老いた祖母もいる。田畑はない。食べるものがない！こんな絶望的なことがあるだろうか。学校から帰ると野山に野草をとりにゆき，わずかな米麦を加えてうすい雑炊を作った。大豆やいも，大根，野草を加えた形ばかりのおべん当をもっていく。その分，家族の雑炊がうすくなる。（中略）しかし「ほしがりません勝つまでは」である。どんなにお腹がすいても，私達には勝ち抜くという大目標があった。ぐちは云わなかった。
>
> 徹頭徹尾「天皇陛下のために命をささげるのは本懐である」と教育され「大君の辺に

★01 「楠本」は旧姓で，以下，「山内」（山内幹子）と表記する。
★02 広島女子高等師範学校附属山中高等女学校は，元々私立の女学校であったが，1945年４月から国立の学校に改組されていた。

こそ死なめ，かえりみはせじ」と確信し，死を賛美さえしているのに[★03]，空襲警報のサイレンが鳴り，敵機が頭上に迫ると防空壕の中で両手で耳と目をしっかりと押さえながら「どうぞ私の上に爆弾が落ちませんように」とおののきながら祈っていた。本当に死が目前に迫ってくると真底からこわいものであった。空襲警報のサイレンはほんとにふるえ上がるほど不気味で，昔，まだ平和な頃，おひるを知らせるのどかなサイレンも，今のこのサイレンと全く同じ音とはどうしても信じられず不思議だった。必死で必死（必ず死ぬ）から逃れようとした。［山内，1988］

1945年８月６日，山中高女の１年生と２年生の生徒らは，朝から建物を壊して防火帯を作る建物疎開の作業にあたっていた。午前８時15分，広島市上空で炸裂した原子爆弾によって千田町にあった校舎は全壊，雑魚場町[★04]で建物疎開の作業をしていた山内の同級生たちはほとんど死亡した。

被爆時に体験した時のことを山内は，以下のように語っている。

山内幹子は，1945年当時，１歳下の修道中学の弟と尾長の下宿に住んでいた。原爆が投下される数日前，島から下宿を訪ねた母親は，衰弱した子どもたちを目にした。ふたりは食糧不足による栄養失調から階段も上がれないくらいになっており，そのまま江田島に連れ戻された。山内たちきょうだいは，島で食べ物を口にして少し体調が良くなったことから８月５日から再び広島の下宿に戻ることになった。しかし，山内は地元の友だちから「ジャガイモを分けてあげるから」という言葉につられて広島の下宿に戻るのを１日遅らせた。

８月６日。この日，山中高女の生徒たちは雑魚場町での建物疎開にあたることになっていた。しかし，広島市の対岸である江田島の切串から連絡船で通学していた山内は，この日，集合時間に間に合わなかった。朝７時過ぎに発令された警戒警報によって，船の出発が遅れたためだ。当時江田島航路では，空襲警報が出るたびに船が止まったり遅れたりするのが常だった。

★03　敗戦色が濃くなる中でも国は新聞等を通して本土決戦への決意を国民に求め続けていた。中国新聞は，1945年７月20日に「命よりも物資が大事」との座談記事を掲載。「兄３人が海に死んだのだからその後に続くのだと。どうしても特攻輸送隊に入れて呉れと」と美談として紹介したほか，７月27日には陥落した沖縄について，軍事記者の解説として「沖縄戦は無為な敗戦ではなかった。作戦的にはむしろ偉大なる勝利といへる（中略）戦事は九十九回の戦ひに負けても，最後の一回に勝てば勝者となるのであつて，沖縄戦の尊い戦訓を最終決戦たる本土決戦に戦い抜かねばならない」と伝えた。７月28日には「一針々々に闘魂を込めて」と軍需工場に動員された女学生を紹介。「決戦の原動力なれば，たとえ指先が，いやこの腕がなくなるとも一粒を失うことは血の一滴を失うことだと，一針々々に必勝の闘魂が見える」と伝えていた。学校では生徒たちに「生きて虜囚の辱めを受けず，死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」という戦陣訓を繰り返し教えていた。日本中の主要都市が空襲を受け，沖縄でも大きな被害を受けたのちも，死を美化する空気が当時の日本を包んでいた。

★04　雑魚場町は，現在の国泰寺町あたりである。

朝 8 時15分。山内は江田島切串港から広島方向に大きな火球を見た。原爆である。山内は急いで50メートル離れたところにあった防空壕に逃れたが，爆発音と爆風は対岸の島にまで届いたという。大爆発を見た40分後には重症者たちが船で島に運ばれてきた。山内はそれを目にした。被災者の搬送は翌日以降も続いた。運ばれてきた人の中には同級生たちの姿もあった。ほとんどがひどいヤケドを負っていた。遺体となって島に帰ってきた同級生の姿もあった。江田島から見える広島は数日たっても火の手がおさまらなかった。山内幹子が両親から広島に向かうことを許されたのは，対岸から見える市内から炎が見えなくなってからである。原爆投下から 5 日たっていた。島から広島に渡った山内が見たのは想像を超えた惨状だった。学校は全壊。建物疎開にあたっていた同級生232人のうち，生き残ることができたのは 2 人だけだった。江田島の船が遅れて直接被爆は免れた山内自身も入市被爆者となった。

> 学校は焼けてしまって。江田島から見ると毎晩赤々と焼けているんですね。広島が。それで母が行かせてくれなかった。5 日目に広島の火が消えて，ようやく行かせてもらったら，学校も何もなかった。（学友も）全部亡くなりました。全部。もう全然……。2 年生で助かったのは 2 人いたんですけど，早く亡くなりました。1 年生でひとりいたんですけど，早く亡くなられました。（2017年 6 月 1 日）

山内幹子が焦土と化した広島を歩いた 5 日後，戦争が終わった。ラジオで玉音放送を聴いた山内は，死を覚悟した。この時の様子を山内は，2013年に朝日新聞の読者欄に投稿した。「敗戦直後 危うく一家心中」と題された投稿は 5 月21日の朝刊に掲載された。

> 45年 8 月15日朝，「ラジオ放送を聴くように」とのおふれで近所のお坊さん宅の庭に集まった。放送は聞き取れなかったが，大人たちが「戦争に負けた」と話していた。「生きて虜囚の辱を受けず」とたたき込まれていた女学校 2 年生の私は，「死ぬしかない」と決心した。
>
> 家に戻ると，母は大事に残していた白米を炊いてくれた。久しく食べていない銀飯に 3 人の弟はむしゃぶりついた。私は「母は自分で死ぬだろうが子どもは殺せないだろう。私が出刃包丁で弟らの胸を突き，その後自死を」と考えると食事がのどを通らなかった。父は軍属として南洋トラック諸島に行ったきりだった。
>
> とその時，裏に住むおじさんが窓から首を突っ込み，「戦争が終わったで。お父っつあんが返ってくるで！」と怒鳴ったのだ。私はきょとんとした。一家はそれをきっかけに生き延びた。［山内，2013］

山内家には田畑がない。わずかな配給の米麦と野草などで作った薄い雑炊で毎日の食事を済ませていた。米は家族の命を支える最も大切なものであり，それだからこそ，母親は節約に節約を重ね配給の中から米を大切に残していた。敗戦を知った母親は，大切の残してあった米を「銀飯」として炊いた。けっして祝い事ではない。軍国教育の中で生きていた山内家にとって，戦争に負けることは自分たちの命を絶つことに直結していた。「銀飯」は山内家の最後の晩餐を意味していた。

だからこそ，母親は最期の食事として限られた白米のみのご飯を炊いた。裏に住むおじさんが怒鳴ってきたということは，その時の山内家の状況が「普通ではなかった」ことを示している。一方，おじさんの怒声で「きょとん」とするほど山内の家族は「死ぬ必要はない」ということに思いが及んでいなかった。このおじさんの怒声によって死は免れた。しかし山内幹子の長く深い苦悩は，この時からが本当の始まりだったと言えるのかもしれない。

千田町の校舎が全壊した山中高女は12月，豊田郡安浦町の海兵団跡のバラックに移転した。生き残った生徒たちは安浦に集められ，寄宿生活での授業が再開された。山内の同級生は入学時336人だったが，被爆を免れ生きて再会できたのは30人くらいになっていた。安浦に移転した学校生活のことを「山中高女安浦時代」という手記に残している。

> 再開された学校は安浦駅の真正面に位置し，広い敷地に木造二階建ての南北に長い大きなバラックが幾棟もずらっと並んでいました。一番北にある数棟を女高師が使用し，真ん中の５～６棟が附属で，南側は当時の広島医専が入りました。建物はそう古いものではありませんでしたが，海兵団跡のこと，虱，蚤，南京虫に悩まされました。建物に入ると痩せた蚤がぞろぞろと足にはい上がってきます。私は友達と蚤取り競争を始めて，一日に300匹位殺したことがありました。始めは水道も出なくて，田んぼのため井戸に洗面器をもっていって洗い，翌朝の洗面のために水をくんできていました。飲み水もないので，禁止されているその水を飲んだりしました。附属の校舎の一番駅寄りの一棟が寮として使われ，当初は二段ベッドでしたが，数が足りないので一台の上下に四人がねておりました。食べ物も塩も乏しく，小さなお茶わんに，塩味のない薄いぞうすいが一食分で，みんなお腹を空かして，二段ベッドの上でボンヤリしていました。［山内，1987］

戦時中も栄養失調で下宿から島に連れ戻されたことのある山内であるが，安浦での寄宿舎生活はさらに厳しいものだった。空腹から動くこともできなかった。

被爆から４か月過ぎても行方不明の家族を探す人は少なくなかった。安浦に移転した学校にも，娘を探しに家族がたびたび訪れ。この時の記憶を1985年，山内は山中高女の追悼文集に「鎮魂のうた」という題で寄稿している。

そこにも行方不明の子供を探して父兄が来られた。或る日二年四組の田中昌子さんのお母さんが来られた。全員二段ベッド生活していたが，お母様は必死のお姿で「田中昌子を知りませんか。」とベッドをがたがたゆすって探し廻られた。なのに私はベッドの上で，ぼう然として眺めているだけだった。本当に申し訳ないことをした。今なら手をとりあって昌子さんのことを涙ながらに話し合えるのにと残念でしかたがないが，原爆に次ぐ終戦，そして厳しい日々の食糧難の中をやっと生きていた十四歳のわたしたちは正常な神経であるはずがなかった。許していただきたいと思う。昌子さんは非常にまじめな人で，岩国から同郷で同じクラスの脇田美智枝さんと共に汽車通学で，己斐から千田町まで歩いて往復していた。（中略）田中さんは級長で，当時お母様が肝臓が悪くて，学校の裏の南大橋の下でしじみ貝を掘って帰っていた。そこでは体操の時間によく泳いだもので，水着のままでかけ出し，帰ると体育館のシャワーで洗ったものだ。干潮時にも川で体操をすることがあり，体を前後に倒す運動をしていた時，田中さんはまじめにやりすぎて，仰向けに水の中に転び，皆が驚いたこともあった。本当に敬愛すべき人であった。

あの当時のことは記憶が遠くかすんでいるのに，わずか一年四ヶ月の縁でしかなかった級友は全員一人一人が，生き生きと目の輝きさえ伴って鮮明に語りかけてくるのはどうしたことだろうか。［山内，1985］

原爆により学校は全壊し，同級生のほとんどが亡くなった。敗戦を聞いて炊かれた白飯。そして死を覚悟した。しかし近所のおじさんの言葉で死ぬことはやめた。ただ，その先には戦時中よりもさらに厳しい飢えが待っていた。同級生の家族が寮を訪ねて騒ごうが，心も体も反応できなくなっていった。その後飢餓状態を抜け出すと，死んだ同級生たちの顔が浮かんだ。この被爆から安浦の生徒寮に至るまでの一連の体験が，山内自身の心を生涯責め続けた。

3　ABCC の職員となる

山中高女を卒業した山内は，広島女学院大学英文学部へと進学した。大学を卒業した後は政治家・佐古千代子の秘書を務め，1955年に ABCC に転職した。ABCC の採用試験を受けるきっかけは，佐古事務所の近くに住んでいた ABCC の日本人職員からの情報だった。「給料や待遇がとても良い」「いま職員を募集している」という話を聞いて採用試験を受けることにした。山内は ABCC が「被爆者を治療しないで調査対象として研究するアメリカの組織」だという事は知っていた。自分自身も被爆者であり，同級生のほとんども原爆で亡くなった。山内は採用が決まった後も入所すべきかどうか迷ったが，知人からは「あなたが入所をしな

くても別の誰かが入るんだから」と背中を押された。弟たちを養わねばならない山内は，「組織の中で自分ができることをやればよいと思い直し，ABCC の職員となった」[★05] という。

ABCC に就職した山内がはじめに配属されたのは，連絡員の業務だった。被爆者のもとを訪ね被爆状況などを聞き取ることなどが主な仕事だった。山内が ABCC に入所した1955年は，原爆投下から10年を経ていたが，被爆者たちの苦しみはまだ過去のものにはなっていなかった。山内たち連絡員は，毎日20件程度の被爆者を訪ねて話を聞く。連絡員は効率的に話を聞いて次の人のもとへと向かわねばならなかったが，被爆者の話は終わらなかった。息つく間もないくらい一気に話す被爆の状況。山内は被爆者の立場にたって，被爆者の思いをそのまま ABCC の当局に伝えるように努めたという。

山内たち連絡員は，通常午後 3 時くらいには被爆者の調査を終わらせて，比治山の ABCC に戻る。そしてその日のうちにヒアリング内容の整理を行った。山内はいつも被爆者から聞いた話が頭から離れなかったという。事務室では，「あの人はこんな話をしていた」「私はこんな話を聞いた」などという連絡員たちの興奮した声であふれた。それはまるで蜂の巣をつついたようだった。中には「みんなが聞いた話をまとめたら本ができるよ」と言う者もあった。それを聞いた山内は「本当にその通りだ」と思ったという。しかし，山内たちがヒアリングをしてきた被爆状況に関する話はあくまでも調査のための情報であり，その被爆体験談が本や冊子などの形として残されることはなかった。

一方で，被爆者から山内ら連絡員に対して向けられる声には厳しいものも多かった。ABCC は原子爆弾を投下したアメリカが作った組織であり「治療をせずに調査ばかりを行う」など，ABCC に対して不信感の声が高まった。「アメリカに調査をされることそのものが嫌なのだ」という声も少なくなかった。それでも多くの被爆者たちは，ABCC の連絡員に対し，助けを求めるように自分たちの被爆状況を訴えた。しかしその調査データは，ABCC の調査資料としてのみ活用された。当然，被爆者救済に直接影響することはなかった。

★05　ABCC という組織の性格について，『原水爆被害白書』（原水爆禁止日本協議会，1961）の中で，1952年に行われた被爆者と ABCC の日本人職員・槙弘との間で行われた会話記録が残されている。

吉川被爆者：

ABCC は被害者の治療をしてくれると思っていましたところ，一向に治療してくれない。ABCC が，原爆で苦しんでいる被害者に，治療くらいしてくれてもいいのではないでしょうか。いったい治療はするつもりなのか，どうですか。

槙博士 ABCC 日本側：

私も，ABCC の日本側のものとして申しましょう。ABCC の根本の目的が，アメリカで決められているもので，動かすことはできません。放射線の影響を調査するために派遣されてきているので，治療の問題は含まれていないのです。［原水爆禁止日本協議会専門委員会，1961:143］

原水協はこの『原水爆被害白書』の中で，「1950年の国勢調査において日本政府は被爆者の調査を行ったが，それは被爆者治療のためではなく，ABCC などアメリカへの研究の協力であったというべきだ」とも記し，ABCC で診察を受けた被爆者が「モルモットにされた」と怒っていることも記録している。

山内は，アメリカが投下した原爆による被爆者でありながら，加害側のアメリカの原爆による人体研究を行う機関で働くことを自ら選んだ。山内が「被爆者を治療しないで調査対象として研究するアメリカの組織」で働くことを迷いつつ，「組織の中で自分ができることをやればよいと思い直し」たことに鑑みると，複雑な思いを抱えざるを得なかったことは，想像に難くない。

被爆者たちが連絡員に対して積極的に被爆体験を語る状況はしばらく続いたが，山内がABCC に入所して10年たった1965年頃になると，みんなピタッと被爆体験を話さなくなったという。山内はこの時のことを思い出して，次のように語った。

> みんな気がつかれたと思うんです。愚痴を言っても返って来んのんじゃ。言ってもだめじゃと。（2017年 6 月 1 日）

被爆者が口をつぐみ始めたちょうどこの頃，山内幹子に人事異動の辞令が出た。異動先は医科社会学部（Medical Sociology）受付係。新たな業務は ABCC での調査研究に関し各セクション間の調整を行う「スケジュラー」という役割だった。

4　ABCC 内部情報持ち出しをめぐって

1955年に ABCC に就職した山内は，翌1956年に結婚。1957年には長女を出産した。職場では人事異動で連絡員からスケジュラーの業務に担当が変更し，当時，労働組合の役員も務めていた。彼女は，スケジュラーとしての仕事の合間に，業務外のボランティアではあるが，研究者のアシスタント的な雑務もこなし，公私ともに忙しい日々を送っていた。

1965年，山内は知り合いに呼ばれて大正橋近くの喫茶店に向かった。喫茶店に呼び出したのは作家の深川宗俊だった。被爆者でもある深川は，歌人として戦後峠三吉らとに反戦詩歌運動を始め，詩誌『われらの詩』の発刊に参加。多くの歌や詩などの作品を残していた[★06]。

深川からの呼び出しに，山内が当時 7 歳と 6 歳の娘を連れて行っていることから，この時，深川からの呼び出しがそれほど「重い依頼」であることを想像していなかったのかもしれない。

山内が呼び出された喫茶店に入ると，中では深川と「大学教授」が二人で待っていた。2017年時点で山内は深川と一緒にいた人が「大学教授」だという事までは覚えていたが，名前や所属などについては覚えていなかった。この時，深川宗俊は次のように話した，という。

★06　深川宗俊は，広島研究の会の会員ではなかったが，メンバーらとは交流があった。

精神薄弱を伴う胎内被爆の人がいる。普通の被爆者は国が手をつけたが，彼らはだれからも見捨てられている。胎内被爆の人のことを調べたいから，その人たちがどこにどう住んでいるのか調べてくれないか。（2017年６月１日）

胎内被爆者の情報を伝えるということは，ABCC の内部情報を部外者に漏洩することとなり，組織に対する重大な背反行為だ。それでも山内はこの申し出を引き受けた。山内はスケジュラーという業務上，どの課の中にも自由に入れた。そしてすべての課の仕事を知っていた。胎内被爆によって障害を負って生まれた子どもがいることや，その家族の苦しみも，業務を通して知っていた。一方で，ABCC の内部情報の持ち出しは重大な規則違反であり，懲戒免職となるほどのものだということも理解していた。山内は，「この仕事は私にしかできない仕事だ，よくぞ私に言ってくれた」と思い，深川に対してその場で「わかりました。大丈夫です。やります。」と答えた，という。

一般職員であった山内は，研究に関する情報やデータをすべて知っていたわけではない。山内は「知的障害を伴う胎内被爆者」について知るために，まず ABCC の図書室に保管されている業務報告書を読んで，胎内被爆小頭児に関する論文を見つけた。けれども，その論文に氏名や住所などは記されていなかった。唯一手掛かりとなると思われたのは，論文の中に記された「マスターファイルナンバー」だけだった。この「マスターファイルナンバー」とはカルテ番号にあたるものだ。ABCC で検査を受けた被爆者たちには，一人ひとりに６桁の番号が割り振られている。そしてその検査データは，すべて「マスターファイル」という場所に厳重に保管されていた。マスターファイルは，被験者一人ひとりの調査研究データを詳細に記録し集約している場所であり，ABCC 職員といえども関係者以外は立ち入ることはできない。しかし，検査業務に関する調整を行うスケジュラーとなった山内は，そこに入ることが可能だった。

山内は ABCC の資料の中から，ABCC の医師ロバート・W・ミラーがまとめ ABCC 長崎の河本定久が和訳して日本医師会雑誌に発表した論文「廣島に於ける胎内被爆兒中の小頭症に就いて」[★07] を抜き出しコピーした。山内がコピーした論文の中には広島 ABCC で調査した知的障害を伴う原爆小頭児16人のデータが記載されていた。もちろん論文の中に氏名などは記されてはいない。山内は論文コピーの裏にマスターファイルナンバーを書き写した。この時のことを山内は以下のように語っている。

★07　この論文は，同じ年にミラーがアメリカで発表した論文「Delayed effect occurring within the first decade after exposure of young individuals to the Hiroshima atomic bomb（広島において原子爆弾最初の10年間に青少年に現れた遅発性影響）」から原爆小頭症の部分を抜粋し和訳されたものだった。

業績報告書を読んで。それに名前は書いていないんです。6 桁のマスターファイルナンバーで書いてあるわけです。このマスターファイルナンバーを調べるのは他の人ではできないんです。そのマスターファイルナンバーを書いておいて，カルテを保管してあるマスターファイルというところに行って。「ちょっとチャート見せてね」とチラッと開けて。マスターファイルにはカルテが 6 桁の順番でずらーっとあるんですが，名前ではなく番号順に並んでいるんです。(2017年 6 月 1 日)

山内は通常の業務を行うふりをして，マスターファイルを管理している課に入った。そして事前に準備をしていた論文コピーに記載されているマスターファイルナンバーをもとに原爆小頭児たちの情報を探した。見つけ出したチャートから，名前と住所など最低限の情報をさっと論文コピーの裏側に書き写した。許可なくデータを抜き出していることが見つかると大変なことになる。山内は手早く必要な情報を少しずつ書き写した。山内はこの時の様子を次のように語った。

チャートを開けては見なかったです。マスターファイルナンバーと住所と名前しか必要なかったですから。第一，盗み見るわけですから。よその部屋に入ってぼやぼやしとられんわけです。(2017年 6 月 1 日)

山内によると，胎内被爆小頭児の名前と住所を書き写すのに，1 か月もかからなかったという。山内は書き写した氏名や住所などの情報をまとめて深川宗利に渡した。山内はこの時のことを思い出して次のように語った。

小頭症の人たちは，本人には何の罪もなく，母親の胎内で被爆したために障害が残った。非常に数少ない人たち。不当な障害なんですよね。戦争にも行っていない。原爆のせいということを本人は知らない。親も知らない。とても不当なことです。被爆でこのような目にあったと知らない人も多かっただろうと思いますし。普通の被爆者は手帳をもらって医療費がタダになったり支援をもらったりしたけど，あの人たちには何にもなかったんです。その中で，周りの目を耐えて生きてきたと思うんですよね。だから，私はそのお手伝いが出来たのは，喜びというのは変ですが，やりがいがあると思いました。
(盗み出したことを誰かほかの人に話しましたか？)
知らない。誰も知らないですね。
(ご家族には？)
言ってないです。主人に言ったかもしれないけど，主人は興味ないようにしていました。

その後，労働組合の幹部から「誰がやったんだろう」と訊かれたけど，私は言いませんでした[★08]。（2017年６月１日）

5　山内幹子をめぐる記憶と記録

既に述べたように，山内がABCCから持ち出した内部情報が「広島研究の会」のメンバーである秋信利彦の手に渡ったことをきっかけとして，原爆小頭児と家族の会「きのこ会」が結成され，原爆放射線の影響による障害「原爆小頭症」が認定され，各種手当てや医療給付など，原爆小頭症に対する「救済の道」へとつながっていった。この情報に関して，秋信は，「匿名のハガキが来て，そこに名前だけが書いてあった」と語り，山内幹子のことはけっして口外しなかった。具体的なことを聞かれても，秋信は「差出人が書かれていないハガキが…」という答えを他界するまで繰り返した。

一方，平尾が山内幹子に行ったインタビュー（2017年）では，「匿名でハガキを出した」という語りはなかった。

広島研究の会メンバーできのこ会事務局を務めていた文沢隆一から広島研究の会を主宰する山代巴に――きのこ会が設立された直後，1965年７月31日に速達で送られた――書簡[★09]には，下記のようにある。

> その後，判明した小頭児の報告をいたします。ABCCで調査をしていた十六名の小頭児の名前がわかりました。ニュース・ソースは絶対に秘密にするという約束で，例のABCCに勤めている女の人から，名前だけ教えてもらいました。広大で調査した九名と重複している子供をのぞき，新たに十一名，そのうち四名はすでに死亡。一名は別のルートから第二回のきのこ会に参加してもらった人。もう一名は，大野寮にいて，秋信君が以前から原爆小頭児ではないかと思っていた人で，一昨日（二十九日）に訪れ，次回からのきのこ会に参加したいという承諾を得ました。［文沢，1965］

広島研究の会のメンバーたちは，山内幹子の存在とその行動を全員で隠し続け，山内も，ABCCの情報を流出させたことは，長く公の場では語らなかった。山内が初めてABCCの内部情報を流出させたのが自分であると公表したのは，2010年11月「秋信利彦さんを偲ぶ会」

★08　山内の長女・原森泉は，小学生か中学生の頃，母・山内幹子から「ABCCの資料を持ち出したことがある」と聞いたことがある，と語っている。しかし原森は当時，母親が話していたことが原爆小頭症についてだとは認識はしていなかった，という。

★09　この書簡は，きのこ会の事務局を務めていた大牟田稔の手元に保管されていた。

の中だった。しかし，山内は「秋信の存命中に，一度だけ情報流出について部外者に話をしたことがある」と語った。相手は当時朝日新聞広島支局に在籍していた武田肇記者である。この時のことついて，2021年 9 月に確認したところ，武田記者は2007年，ABCC 設立60年に合わせて特集記事を書こうと，ABCC の OB・OG 名簿を入手して，片っ端から取材をしていた，という。その過程で武田は山内幹子と出会った。武田記者は山内ひとりを単独で話を聞いたためか，山内の方から話し出したという。武田記者は当時のことを振り返り，「なぜ私に話されたかわかりませんが，そろそろ時効だという思いだったのではないでしょうか」と語っている★10。

> 山内さんの「告白」を聞いたとしても，事前に元中国放送記者の秋信さんの存在を知らなければ，ピンと来なかったかもしれません。偶然と言えるのかわかりませんが，私は前年に秋信さんに会っていました。私は2006年 4 月に広島支局に初めて赴任し，原爆・平和担当になったのですが，全くの手探り状態だったため，とにかくいろんな関係者に話を聞いて自分の頭の中に年表を書くことから始めました。秋信さんもその 1 人でした。秋信さんに会ったのは，先輩記者から「昭和天皇に原爆投下をどう思うかずばり質問したすごい記者がいる」「小頭症患者の所在を調査報道し，きのこ会も作った」と聞いたためです。五日市のご自宅を訪ねました。秋信さんはすでに鼻に酸素吸入のチューブを付けておられましたが，お元気でした。2007年 6 月ごろ，山内さんの「告白」を聞いたあと，すぐに秋信さんに伝え，確認をしました。秋信さんは私の取材に①1960年代，自分の足で稼いだ情報に加えて，「匿名の情報提供」をもとに小頭症被爆者を取材した，②職場か自宅に，小頭症被爆者の住所がぎっしり書かれた差出人不明のはがきが届いたと記憶している，③取材源秘匿の原則を貫き，この件は誰にも話さず，山代さんと一緒に書いた岩波新書『この世界の片隅に』でも，情報源はあえて記さなかった，と話しました。このとき，秋信さんに「山内幹子さん」という名前を伝えたところ，意外にもお名前は承知で，「もしかしたら，そうかもしれないと思っていた」という反応をされたことを覚えています。（武田，2021年 9 月）

武田記者はこの経緯を2007年 8 月 6 日付の朝日新聞社会面で「誰がために　ABCC60年㊥匿名投書　被爆胎児に光」という記事で紹介した。この時，武田記者は山内や山内の家族に迷惑がかかることを懸念し，記事は匿名で発表した。そのためか，「掲載当時に反響はほとんどなかった」という。

★10　同じ時期に中国新聞の記者も山内に取材をしていたが，この時は ABCC の同僚 2 人一緒に話を聞いたためか，情報流出については語らなかった。

6 「伝えたのは私なんです」

原爆小頭児を探し出し当事者と家族を支え続けた秋信利彦は，山内幹子のことを口外せぬまま2010年に他界した。きのこ会では広島平和記念資料館で「秋信利彦さんを偲ぶ会」を開いた。筆者は偲ぶ会のスタッフのひとりとして会場の中にいた。会場は参列者でいっぱいだった。朝日新聞の武田は，山内幹子と一緒に「偲ぶ会」に出席した。山内が望んだからだ。武田はきのこ会事務局の平尾（筆者）に，情報流出の当事者が出席することを伝え，「ご本人はいま，自分がやったということを隠しているが，秋信さんに最後のお別れをしたいと思っているので，配慮をしてほしい」と依頼した。きのこ会の事務局はそれを受け，山内の情報は誰にも告げず，静かに偲ぶ会に参加できるような対応をとった。

登壇者が秋信の思い出を語る間，山内は客席で静かに座って話を聞いていた。会の終盤に客席にマイクが回された。秋信ゆかりの人たちがそれぞれの思い出話を語った。それまで静かに座っていた山内は突然立ち上がり，話し始めた。

> ABCC の情報を秋信さんに伝えたのは私なんです。私自身，女学生の時に被爆し，ABCC に勤める矛盾に苦しんでいました。（山内，2010年11月28日）

周囲から驚きの目が向けられる中，山内は情報を持ち出した45年前の記憶を静かに語りはじめた。それまで他人のような表情で山内の近くに座っていた事務局の文沢隆一は，山内の告白を聞いて，懐かしそうに近づき声をかけた。

会場はざわめき，取材に来ていた記者たちは，山内を取り囲んだ。そして翌日には山内の顔写真付きの新聞記事が各紙に掲載された。武田記者も本人が公表したことにより，「原爆小頭症リスト 私が提供 元 ABCC 職員が実名」という記事を発表した。

山内によると，直前まで黙っているつもりだったが，秋信について語るきのこ会の関係者たちの話を聞いているうちに感情があふれ，「絶対に口外しない」と決めて45年間守り続けていた意志を超えてしまったのだ，という。山内は原爆小頭症ときのこ会の人たちのことが，ずっと胸の中で引かかり続けていた。山内は以下のように語っている。

> きのこ会の会員の方々，本当にお気の毒だったなと思います。あの会が出来ないと，原爆のためにああなったと知らない人が多かったと思うんですよね。周りからは白い目で見られていた。そういう方を育てられるのは大変だったと思います。いくら国から保護があろうとどうしようもない，救いのない状態ですから。本当に，原爆ってひどいも

んです。（2017年 6 月 1 日）

秋信は存命中，小頭症と山内幹子の関わりについては語らなかった。しかし山内は，ABCC の情報を提供したのちも短期間ではあるが広島研究の会と行動を共にしていた。きのこ会の設立直後，広島研究の会が中心となって「きのこ会友の会」を作ろうという動きが起こったが，秋信の書き残していた手帳の中に，設立準備会のメンバーのひとりとして山内幹子の名前が記されていた。ただし，この「きのこ会友の会」は発足にまでは至らなかった。

2017年のインタビューで，山内幹子は次のように答えている。

> 1 回だけ，秋信さんと一緒に小頭症の家族のところに会を作りたいのでと話に行ったことがあります。そのあとは行きませんでした。やっぱり ABCC で秘密にしていたことを盗み取っているから公には顔を出したくなかったですね。（2017年 6 月 1 日）

山内は，まもなく原爆小頭症に関するすべての支援活動から手を引いた。何者かから尾行をされるようになったからである（山内の長女・原森泉は，自宅に帰った母親が「誰かに尾行されて怖かった」と怯えていたことを覚えている），という。

秋信たちに ABCC の内部情報を提供した山内幹子は内部情報を流出した後も勤務を続け，ABCC の後継組織となる放射線影響研究所を58歳で退職した。山内は自分が救済のきっかけを作ったきのこ会の会員たちのことをずっと気にしていた。2017年のインタビューの際には「できればきのこ会に参加したい」とも話していた。しかし，自身の体調不良のため，小頭症被爆者たち本人に一度も接触できないまま，2020年に亡くなった。89歳だった。

山内幹子の長女・原森泉は，遺品を整理しているうち，タンスの奥から古い封筒を見つけた。原森によると，その封筒には手書きで連絡先などのメモが書かれていたという。封筒の中には以下の 7 点が一緒に入っていた。

・中国新聞　1965年 6 月28日付け記事 「きのこ会発足　原爆小頭症と闘う」切り抜き
・広島研究の会　冊子「原子爆弾と小頭症」
・ロバート・E・ミラー　川本定久　1956 「廣島に於ける胎内被爆兒中の小頭症に就いて」コピー
・ロバート・E・ミラー　梁井昇（訳）1960「放射線の人間における影響の閾値について」コピー
・Robert W. Miller　1956 「Delayed effect occurring within the first decade after exposure of young individuals to the Hiroshima atomic bomb」をレポート用紙にタイプ打ちしたもの

・Omuta Minoru「Microcephalic children of Hiroshima」Japan Quarterly のコピー
・上記投稿をレポート用紙に手書きで和訳したメモ

「原子爆弾と小頭症」は，広島研究の会が原爆小頭症の周知を目的に制作し関係者に配布した冊子で，プラマー，ミラー，平位の論文をまとめたものである。

「Microcephalic children of Hiroshima」を著した Omuta Minoru とは，広島研究の会のメンバーで，きのこ会の事務局員のひとり，大牟田稔である。この文章は，朝日新聞の英語誌 Japan Quarterly の1966年７月10日号に掲載されたものである。これらの書類を所持していたことから，山内幹子は，ABCC の情報を流出させたあとも，広島研究の会のメンバーと情報を共有していたことがうかがえる。

中国新聞のきのこ会設立の記事などが同じ封筒に納められていたことについては，山内が表舞台から姿を隠した後も，きのこ会のことを気にし続けていたことの証左である。

もう一つの「廣島に於ける胎内被爆兒中の小頭症に就いて」は，ABCC の小児科医ロバート・ミラーが1956年に著した「広島において原子爆弾最初の10年間に青少年に現れた遅発性影響」のうちの小頭症に関する部分のみを抜き出し和訳したものである。ABCC の職員だった山内がこの論文のコピーを持っていることについて不思議はない。注目すべきは，裏の余白に書かれた走り書きのようなメモである。そこにはカタカナの17人の氏名と６桁の数字，性別，誕生日が記されており，表側の論文に匿名で記された小頭症の子どものデータと一致した。これは山内がマスターファイルに入り込んで秘密裏にデータを抜き出した際に使用したものであり，まさに存命中に山内が語った話の内容を裏付ける資料であった。

山内幹子の遺品の中から見つかった論文コピー（図１）には，山内が ABCC から内部情報を抜き出した痕跡が残っている（図２）。これは，1956年にミラーが著し共同研究者の河本が和訳した論文「廣島に於ける胎内被爆兒中の小頭症に就いて」をコピーしたもので，小頭症の個人データを示す表の部分に赤鉛筆で印がつけられていた。赤線で囲まれた部分に記されていたのは，知的障害のある小頭症16人のデータである。症例番号，M.F. 井，性別，胎内期間，被爆時の胎齢，ABCC 診察時における年齢，頭囲，身長，母親の放射能症の症状，他の疾患，と11項目が詳細に記されていたが，氏名についてはイニシャルも含めて記載はされていなかった。このコピーの裏側には，走り書きのような手書きのメモが残されていた（図２）。メモの内容は，６桁の数字，カタカナで書かれた氏名，６桁の数字，１桁の数字の順で，16人分の情報が書かれていた。カタカナで記された名前のほとんどが，後に原爆小頭症と認定され，きのこ会の参加した胎内被爆者たちだった。このコピー裏側の左端に記されていた６桁の数字と，表の論文の中で「M.F. 井」の欄に記載されていた６桁の数字は，上下の順番を含めてすべて一致した。

図 1　山内幹子の遺品から見つかった「廣島に於ける胎内被爆児中の小頭症に就いて」コピー

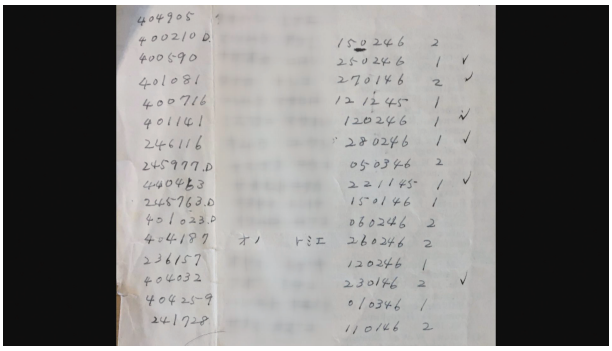

図 2　図 1 の論文コピーの裏に手書きされたメモ
（個人を特定できないように小野トミエを除いて氏名部分を加工処理）

原爆小頭症被爆者小野トミエは，論文コピー裏の手書きメモに名前が記されていた16人のうちのひとりである。小野は子どもの頃に ABCC で調査を受けており，ABCC から健康診察カード（図 3）を交付されていた。この健康診察カードには，受付（MF）番号，氏名，性別，生年月日が記載されていた。2017年に小野から聞いた話では，「受診するときはこのカードを出していた」という。

健康診察カードの左上に記された「受付（MF）番号」は 6 桁であった。小野に割り振られた番号は「404187」であり，コピー裏に書かれた小野の名前の左横の番号も「404187」。まったく同じだった。つまり，健康診察カードの「受付（MF）番号」と，メモの左側にある番号が同じだということは，論文中の表に記された「M.F.　井」の同番号にあたる部分は

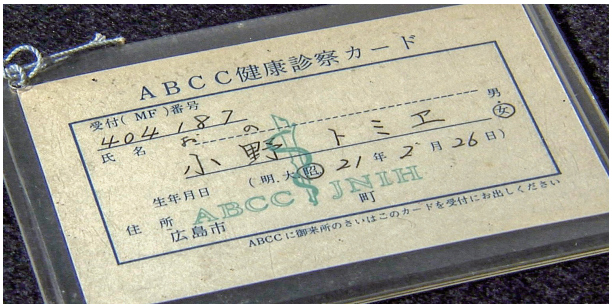

図 3　ABCC 健康診察カード（左上に 6 桁のマスターファイル番号）

小野のデータそのものであり，この 6 桁の番号は「マスターファイルナンバー」であるということになる。論文裏のメモで，「オノトミエ」の右横の数字は「260246」。これを「26日，02月，1946年」と考えると，健康診察カードに記された小野の誕生日と一致する。手書きメモの右端で「1」または「2」と表された数字については，男性の名前は「1」，女性の名前については「2」が書かれていた。

以上の点から，論文コピーの裏側に記されたデータは，「ABCC 健康診察カード」に記されていたデータを書き写したものであると考えられる。この手書きメモは，山内がマスターファイルに入り込んで秘密裏にデータを抜き出した際に使用したものであり，山内の「あらかじめ論文から 6 桁のマスターファイルナンバーを書いておいて，盗み見るように小頭症児のデータを書き写した」という証言を裏付ける資料といえる。

小野トミエの検査診察カードには，住所を記す欄はあるが，記入はされていなかった。論文コピーの裏に山内が書き写したメモにも住所は記入されていなかった。つまり，ABCC の論文コピーの裏側に山内幹子が書き写したデータは，健康診察カードに記載されていた情報と完全に一致していた。山内は「住所」についても広島研究の会に手渡していたことから考えると，データの抜き出し作業は複数回にわたって行われたことがわかる。

7　「本当に救われたのは母 山内幹子ではなかったかと思います」

これらの資料の発見を受けて，2020年12月 4 日，山内幹子の長女・原森泉に対し，遺品の中から見つけたときの状況や，母親から聞いた話や状況に関する記憶についてインタビューを行った。

> 母が亡くなってから家を片付けていた時に，タンスの奥から出てきまして。本人の手記がないので大したことないなと思っていたら，裏にこの記号を見つけたので。手書き

の番号を見つけました。あっ，これはもしかしたら貴重なものかもしれないと思いました。母はABCCの資料を抜き出したことについて，あんまりしゃべらなかったんですけど，時々言っていました。「調査の時に人につけられて怖かったんよ」とか。

（それを聞かれたのはいつ頃ですか？）

30年前くらい？ですか。しかし会社の規則違反だし，言ってはいけないと思い，私も聞かないようにしていたし。

（知ってはいらっしゃったんですか？）

ええ。そうなんです。

（お母様はどんな方でしたか？）

粘り強いというか，自分が言ったことは曲げないというか。結構強烈な…「ABCCの調査員だった時はジープに乗って走り回り，ジープから飛び降りて駆け回っとったんよ」とか。最初は結構みなさんが被爆当時のことを話してくれたけど，だんだん話してくれなくなりました。最初はしゃべりたいというのはあるけど，母も被爆者だから，わかってくれる人が来たというので喜んで話してくれたんだけど。そのうち，調査をしても治療をしないことがわかって，調べても治してしてもらえないことがわかって，理不尽な思いをする人が増えて，話をしなくなったようです。

（2010年に名乗り出たことについて，どう感じましたか？）

なんで名乗り出たのかと思ったんですよね。私だったら墓場まで持っていくって。まず，バッシングを受けますよね。もしかしたら放影研側から提訴されることがあるかもしれないと，すごく恐れていました。だから，いまだに疑問なんですけど。全面的に私が出て行って戦わなくちゃいけんと思っていました。それが，非難めいたことはなくて，よくやってくれたという声が届いたようで安心しているんですけど。母の行動について，いま考えるとしょうがないっていうか，まぁ，よくやったなっていうか。危険を冒してというか，スパイみたいなことをよくやったなというか。

原爆で，雑魚場町，いまの国泰寺町で建物疎開をしていた（母の）同級生たちが亡くなりました。「１年生と２年生だから12歳から14歳で全滅したんよ」というのはしょっちゅう言っていましたね。みんなヤケドをしてとか，ボロ布を垂らしているようにして歩いていたとか，真っ黒こげになって亡くなったとか。そういう話はよくしていました。前の日に皆実町に下宿する予定だったのが，江田島の友達から「ジャガイモあげるから江田島におってくれ」と言われて。自分は栄養失調でもうほとんど階段も登れないくらいの栄養失調らしいんです。それで江田島に帰ったというんです。本当は皆実町に下宿する予定だったというんですけどね。罪悪感はすごい強かったです。ずっと言っていました。それは。「私だけ生き残ったので申し訳ないんよね」って，時々言っていました。

（アメリカの調査機関に勤めることは）自分の中に矛盾を感じていたみたいなんですけど，なんせ労働条件や給与面でよかったんで，弟たちの学費の援助とか，まぁいろんなことがあって働かなければいけない立場だったんで，長く働けるところで選んだんだと思います。英語も多少できたので，自分の専門性を活かせるところということだったんだと思います。きのこ会ができて，原爆小頭症の人が救われた。自分は人生の最終盤だというのもあったんで，いいかなというのもあったのかなと思いますね。最後まで罪悪感を持っていたんですけども，小頭症の方々を助けることができて，かなり救われたところもあったと思います。（原森，2020年12月４日）

山内が亡くなった３か月後となる2020年10月，広島市内できのこ会の総会が開かれた。この総会に山内幹子の長女・原森泉が初めて出席した。あいさつに立った原森は次のように語った。

きのこ会のみなさんから「母のおかげで救われた」と感謝の言葉を伝えられました。しかし，本当に救われたのは母・山内幹子本人ではなかったかと思います。（原森，2020年10月18日）

8　むすびにかえて

山内は英語力を活かし，アメリカが設立した原爆傷害に関する研究機関・ABCC に就職した。「被爆者をモルモット扱いにしている」という話は入社前から知っていたが，悩みながらも入社した。理由は家計的に家族を支えるためだ。ABCC で担当したのは「被爆者の話を聞いてまとめる」仕事だった。被爆者たちの話を聞けば聞くほど理不尽さが胸を刺した。それでも真面目に仕事を続け，ABCC 所内の研究業務を調整するほど重要な仕事を任されるまでになった。

そのような時に，部外者から障害のある胎内被爆者の情報を求められた。もちろんそれがいけないことで，厳しい処分を受けることも理解していた。そのうえで，山内は情報を抜き出すことを即決した。この時のことを山内は以下のように語っていた。

よくぞ私に言ってくれた。その作業ができるのは私しかない，というのはありましたね。被爆でこのような目にあったと知らない人も多かっただろうと思いますし。国から普通の被爆者は手帳をもらって医療費がタダになったり支援をもらったりしたけど，あの人たちには何もなかったんです。その中で周りの目を耐えて生きてきたと思うんです

よね。だから，私はそのお手伝いができたのは，喜びというのは変ですが，やりがいがあると思いました。(2017年 6 月 1 日)

情報を流出させたことを山内は「喜び」「やりがい」と語った。山内は情報を流出させた後も，支援活動に関わり続けようとした。しかしジャーナリストによって原爆小頭児の存在が明らかとなると，ABCC では「内部に実行犯がいるのでは」と調査が始まった。労働組合の役員からは，情報流出に関して話を聞かれたりもした。疑いの目が向けられ始めたことで，自分と家族を守るために山内はきのこ会との接触を断った。

山内は，学友のほとんどを失った山中高女の卒業生として，そして入市被爆をした被爆者として，いくつかの体験記を残している。山中高女の卒業生らが製作した追悼集では，編集委員のひとりとして記録活動にも加わった。1995年に厚生省が被爆者を対象に行った調査では，山内は当時14歳だった自らの被爆体験を記している。広島の対岸となる江田島から原爆の閃光を目撃し，５日目になってやっと学校のある本土に渡った。そして知った広島の惨状。級友の死。厚生省が準備した用紙だけでは書ききれず，裏面までペンを走らせていた。

私の目の向こうは何のさえぎるものもなく広島が見えていた。その時，晴れ上がった空から太陽を反射して激しく目を射るものがだんだんこちらへ つーとのびてくるように思えた。あれは何？と指さすと大人が「爆弾じゃ」というのが早いか皆が裏の山をぶちぬいた大きな防空壕に向かって走った。壕へたどり着いたとたん，ものすごい爆発音がして皆がなぎ倒された。（中略）だれかが「出てみいや 空がものすごいで」というのでおそるおそる出てみると頭上一ぱいに白や赤や金色の巨大な雲が音もなくわんわんと湧きかえっていた。そのすごさは50年たった今も忘れられない。［山内，1995］

山内が書いたこの被爆体験記は，いま，国立広島追悼平和祈念館に納められている。手書きの文章の最後は，以下の文章で締められていた。

雑魚場町で家屋疎開をしていた同級生は１年生１人，２年生１人を除いて全部亡くなってしまわれた。どうして自分だけが生き残れたのか。幸運というには余りに申し訳ない状態で現在あることが不思議でならない。戦争，とりわけ，核戦争がなくなることを 切に希い 努力していきたい。［山内，1995］

山内幹子は晩年，広島市内のマンションにひとりで暮らしていた。「秋信さんを偲ぶ会」に

おいて情報を流出させたことを名乗り出たのちに体調を崩し，寝込むことが増えていた。

山内の連絡先を知った次世代のきのこ会の事務局は，2015年にきのこ会総会への案内を送ったが，すでに出席することは難しくなっていた。山内は総会案内に記載されていた連絡先をもとに，きのこ会会長の長岡義夫に電話を掛けた。山内から電話を受けた長岡は，この時の電話の応対メモを書き残している。メモに記載された内容は以下の通りである。

４月21日　　ヤマノウチミキコ
ABCC に勤務していた時にきのこ会の人を見つけた
きのこ会総会に欠席
足がダメで寝たきり
話し相手がなく，人恋しい
夜が長くてつらい
きょうは熱があり，息苦しい（長岡メモ，2015）

初めて話をする人に対する欠席連絡での会話としては，ずいぶん自分自身の心の中を吐露している。きのこ会会長の長岡が聞き出したためかもしれないが，自分自身の正直な弱みを伝えていた。この時の様子を長岡から聞いて，きのこ会事務局メンバーでもある平尾（筆者）も山内と電話でやり取りを繰り返すようになった。そのたびに山内は「きのこ会の人たちに会いたい」と話していた。 2017年に自宅を訪ねインタビューを行った際も，原爆小頭症の当事者たちに直接会って，励ます言葉をかけたいと望んでいた。しかしこの時はすでに30分ほど座って話をすることも辛くなっていた。

2018年５月18日に届いたきのこ会総会の出欠の返信ハガキには次のように記されていた。

いつもお世話になっています。出席したいのですが，体具合が悪くて残念です。今後ともどうぞよろしくお願いします。

2019年５月27日に届いた総会の返信ハガキからは，さらに厳しい状況がうかがえた。

いつもおせわになっております。下って私の身体具合は一向に良くならず，おまけに加療が加わってまいりました。皆様とお目にかかりたいのですが，残念です。

この後，山内幹子の体調はさらに悪化し，翌2020年７月７日に他界した。胃がんだった。

愛国教育を受けた山内は，日本の敗戦を知った時には「生きて虜囚の辱めを受けず」と自

死をも考えた。原爆によってほとんどの級友を失った。再開した女学校の生徒寮では，行方不明になった娘を探しにやって来た親たちから「なぜあなたが生き残ったのか」という厳しい言葉を投げつけられた。原爆投下の前日に予定通り寮に戻っていれば，同級生たちと一緒に建物疎開に参加して同じ運命をたどるはずだった。山内は生き残ったことへの罪悪感を抱き続けた。

周囲に迷惑をかけてはならないと口を閉ざした45年間。山内は ABCC から小頭症の情報を持ち出したことは生涯誰にも話さないと心に決めていた。しかし秋信利彦の死に接し，山内は自分の気持ちが抑えられなくなった。「偲ぶ会」での公表直後，山内の晴れ晴れした表情を筆者（平尾）は見た。

情報を流出させたことを「喜び」「やりがい」と語った山内にとってきのこ会の存在は，娘の原森泉の言うとおり感謝の対象となっていたのであろう。自分が救済のきっかけを作ったきのこ会の会員たちのことをずっと気にしていた。山内は「きのこ会に参加したい」「小頭症の人たちに会いたい」と話していた。原爆小頭症被爆者の支援活動に関わりたいと強く思いながら，結局，小頭症被爆者たち本人に会うことは叶わなかった。

本稿では山内幹子を通して被爆者の心の変化について見つめたが，内部情報流出を行ったことでどのような役割を果たしたのかまでは迫ることはできなかった。山内幹子とジャーナリストたちが隠されていた原爆小頭症の被爆者たちの存在を世に知らしめたが，今後はその役割と起こした変化について明らかにしたい。

付　　記

本稿で使用したインタビュー・データ，手記，書簡などの収集は，平尾直政が実施した。尚，本稿は，平尾直政が草稿を作成した後，中根光敏が修正し，修正稿を平尾直政が最終稿に仕上げた。

文　　献

文沢隆一，1996，『ヒロシマの歩んだ道』，風媒社
原水爆禁止日本協議会専門委員会，1961，『原水爆被害白書 隠された真実』日本評論新社
広島市役所（編），1971a，『広島原爆戦災誌 第 1 巻』　広島市役所
広島市役所（編），1971b，『広島原爆戦災誌 第 4 巻』　広島市役所
きのこ会（編），1967，『きのこ会会報 No. 3』　きのこ会
きのこ会（編），1969，『きのこ会会報 No. 5』　きのこ会
MILLER, Robert W., 1956, *Delayed effect occurring within the first decade after exposure of young individuals to the Hiroshima atomic bomb*

ロバート・W・ミラー，1959,「広島において原子爆弾最初の10年間に青少年に現れた遅発性影響」ABCC 業務報告書32–59
ロバート・W・ミラー，河本定久（訳），1956,「廣島に於ける胎内被爆兒中の小頭症に就いて」『日本医師会雑誌』
PLUMMER, George., 1952, *Anomalies occurring in children exposed in utero to the atomic bomb in Hiroshima*, Atomic Bomb Casualty Commission
ジョージ・プラマー，1959,「広島市における胎内被爆児童に発現した異常」『ABCC 業績報告書29–59』
山内幹子，1985,「鎮魂のうた」『追悼記』広島女子高等師範学校附属山中高等女学校原爆死没者追悼文集編集委員会
山内幹子，1988,「告発」『ひろしま 24号』日本民主主義文学同盟広島支部
山内幹子，2013年 5 月21日朝刊 読者投稿,「敗戦直後 危うく一家心中」『朝日新聞』
山代巴（編），1965,『この世界の片隅で』岩波新書
山代巴，1965,「きのこ会の示唆するもの」『展望』筑摩書房
◆新聞
朝日新聞社，2010,「原爆小頭症リスト 私が提供元 ABCC 職員が実名」『朝日新聞』 2010年11月29日付け
中国新聞，1945,「命よりも物資が大事」『中国新聞』 1945年 7 月20日付け
中国新聞，1945,「隠忍自重の意義大 最後に勝てば勝者」『中国新聞』 1945年 7 月27日付け
中国新聞，1945,「一針々々に闘魂こめて」『中国新聞』 1945年 7 月28日付け
中国新聞，1965,「きのこ会発足　原爆小頭症と闘う」『中国新聞』 1965年 6 月28日付け
◆ウェブサイト
公益財団法人放射線影響研究所，2021,「ABCC- 放影研の歴史」 2021年 9 月28日取得
https://www.rerf.or.jp/uploads/2017/07/rerfhistj.pdf
公益財団法人放射線影響研究所，Preston, Dale L,. 1998,「寿命調査被爆者集団における距離別ガンマ線および中性子 DS86結腸推定線量」 2021年 9 月29日取得
https://www.rerf.or.jp/library/list/periodicals/rerf_update/backnumber/recdostc/ds86gam/
厚生労働省,「被爆者援護施策の歴史」2021年10月19日取得
https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/genbaku09/17.html
埼玉協同病院，2021,「医療被ばくについて　胎児への影響」2021年 9 月28日取得
https://kyoudou-hp.com/sinryo/innaibumon/iryohibaku_taihi/
宇吹暁，1995,「原爆医療法制定前の被爆者問題　広島大学公開講座・被爆50年――放射線が人体に与えた影響」2022年 1 月 4 日取得
https://hiroshima-ibun.com/lec/%e5%8e%9f%e7%88%86%e5%8c%bb%e7%99%82%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%ae%9a%e5%89%8d%e3%81%ae%e8%a2%ab%e7%88%86%e8%80%85%e5%95%8f%e9%a1%8c.pdf
◆その他
文沢隆一，1965,「山代巴宛　書簡」広島大学文書館 蔵
広島研究の会，1965,『原子爆弾と小頭症』 広島大学文書館 蔵
MILLER, Robert W., 1956,「Delayed effect occurring within the first decade after exposure of young individuals to the Hiroshima atomic bomb」をレポート用紙にタイプ打ちしたもの
OMUTA, Minoru., 1966,「Microcephalic children of Hiroshima」Japan Quarterly
山内幹子，1987,「原爆投下当時の状況」手記より
山内幹子，1995,「厚生省調査　被爆体験について　写し」国立広島追悼平和祈念館 蔵

Summary

Living After the Atomic Bombing and Defeat: Focusing on the Japanese Staff who Leaked Inside Information about ABCC's Atomic Bomb Microcephaly

Naomasa HIRAO* and Mitsutoshi NAKANE**

The radiation from nuclear weapons also hurts the little life that sprouted in the mother's womb. The atomic bomb microcephaly that appeared in Hiroshima and Nagasaki was caused by the exposure of fetuses in early pregnancy to the strong radiation of nuclear weapons, and many of them were born with various disabilities such as intellectual disabilities and internal organ diseases. The ABCC (Atomic Bomb Casualty Commission), which had been investigating in utero-exposed children, was aware of the existence of A-bomb survivors with microcephaly early on. However, it was hidden from the parties' families.

Mikiko Yamanouchi, a Japanese staff member of ABCC, extracted data on A-bomb microcephaly survivors kept by ABCC and leaked it to journalists. Yamanouchi, who is also an A-bomb survivor, is a survivor of a girls' school that was wiped out by the atomic bomb. She was saved because the ship to go to school was delayed, but she survived, and she continued to suffer for the rest of her life.

In this article, through interviews and memoirs of Mikiko Yamanouchi, who leaked inside information from ABCC, we will explore her life after the atomic bombing and defeat.

* Hiroshima Shudo University Graduate School
** The Faculty of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University